東日本大震災災害活動報告（復興活動報告）

福島県大熊町消防団　団長　吉田　稔

平成23年３月９日・10日と２日連続で地震が発生し、津波注意報が発令され警戒にあたる。今思うと大地震の前ぶれだった。

そして、３月11日（金）14時46分、私は仕事で原子力発電所４号機で作業中だった。これまで、体験したことのない強い揺れが長く続き、しばらくの間、身動きも出来ず、近くの柱に寄り添い地震が収まるのを待った。地震が収まる少し前に建屋内は全灯停電になり、非常灯を頼りに出口へと向かった。建屋内は、激しい揺れを物語るように設備が揺すられて、舞い上がったほこりで遠くがかすんでいた。多くの作業員が一斉に出口付近に集中し大混乱となり、誰からとなく「津波が来るぞ、早くしろ。」の声が飛び交った。

私は、退出するのが早い方だったので、歩いて15分程の高台にある会社の事務所に向かった。私が事務所へ着いたときは、既に1000人以上の人々で事務所の周辺は混雑していた。会社で仲間全員の無事を確認し、帰路についた。

大熊町は南北に約５kmの海岸線を有し、発電所は町の北端にある。私の家は、発電所より南へ４kmほどの海岸近くにあり、津波の被害が心配で「一刻も早く現場に行かなければ」と焦る気持ちで車を走らせたが、発電所構内から出る車が正門に殺到し、構内から出るのに１時間以上もかかってしまった。大熊町の海岸線は北から夫沢・小入野・熊川地区があり、私が夫沢地区に到着した時は既に津波が到達した後であった。その後、小入野地区を確認し、自宅がある熊川地区へと向かった。自宅周辺の家屋は津波で流失し、一面広い海のようになっていた。

熊川公民館

地元消防団と区長より警戒中の避難状態の報告を受け、その後、対策本部がある役場へ向い、担当者へ状況を報告した。

６号国道から東側住民に対し、体育館への避難広報を開始すると共に、町内の道路状況を確認し、交通規制・バリケードの設置等を行い役場へ戻った。町内は地震発生と同時に全停電となり、電話も通じず情報伝達が容易ではなかった。

対策本部で、翌日の対応の打合せ後、津波で避難中の町民700～800名への炊き出しの準備を夜中

熊川字久麻川地内

奥熊川消防屯所

浜街道交差点

県栽培漁業センター

より始めた。

12日の夜明け前に原子力災害の通報が入り、３km以内の避難指示が、10km以内の避難指示へと変わった。

このことから、急遽炊き出しを中止し、防災無線による広報と各地区消防団による地区内巡回・避難広報を行うと共に、避難バスの誘導・避難住民のバスへの誘導等を開始したが、ほぼ全ての町民の避難を終えたのは、12日の14時を過ぎていた。

町民は、田村市・三春町・郡山市・滝根町・小野町へと分散しての避難となったことから、消防団は田村市総合体育館に本部を設置し、団員は各避難所での警備・救護物資の荷受け・員数確認と分配・食事の世話等を３月12日から４月４日まで行った。

その後、避難者は、二次避難先である会津若松市周辺の旅館・ホテルに移り、現在に至っている。

３月11日の地震津波による流出家屋約50戸、行方不明者も十数人おり捜索活動がこれからという時に何も出来ないまま、町民全員が避難者となり消防団員として残念でならない。

ただ、不幸中の幸いは、消防団員に１人の殉職者もいなかったことである。

今回の津波被害を受けた地区の消防屯所は、地震津波災害に備え高台へ移設し、本年２月13日に落成式を終えたばかりで、消防屯所・消防車両の被害はまぬかれた。

これまで、毎年、原子力防災訓練を実施してきたが、今回の原子力災害では、国・県・電力からの情報伝達等の欠落が目立った。

防災訓練等でも、常に最悪の状態を想定し実施しておかなければならない。人生には、「上り坂・下り坂、そしてまさか」と言う坂もあると言う。

そのまさかの時にも対応出来るよう、常日頃からの訓練に心がけて行く所存である。

現在、大熊町をはじめ福島県消防協会双葉支部に所属する８町村（広野町・楢葉町・富岡町・川内村・双葉町・浪江町・葛尾村）が避難生活となっています。１日も早く各町村に戻り、故郷の復興に従事出来る日が来ることを願っている。

終わりに、今回の災害で避難所を提供していただきました、県内各地の皆様はじめ様々なご支援をいただきました全国の皆様方に、誌上をお借りしまして心より御礼申し上げます。

小入野字東平地内

小入野字東平地内